

滿洲帝國地方事情大系 (H第二十一號)

奉天省東豐縣事情

目次

第一章 總說	一
第一節 縣の歴史	一
第二節 建國以降現勢一般	一六
第三節 縣政及官公吏	一六
第一項 概況	一六
第二項 縣公署の組織及權能	一七
第二章 地誌・風俗	一八
第一節 地誌	一八
第一項 位置並地勢	一八
第二項 人口	一九

目次

第三項 主要都市	二五
第四項 氣象	三〇
第五項 名勝舊蹟	三一
第二節 風俗	三一
第一項 概況	三一
第二項 種族	三一
第三項 衣食住	三一
第四項 家族制度	三一
第五項 娛樂機關	三一
第六項 儀式祭禮	三一
第三章 地方制度	三五
第一節 地方制度概況	三五

附 行政區劃表三五

 街村戶口調查表四〇

 街村豫算表四二

第四章 財政四七

 第一節 概況四七

 第二節 歲入歲出四八

 第三節 財政政策七〇

第五章 警察治安七一

 第一節 警察七一

 第一項 概況七一

 第二項 組織七一

 第三項 警察官吏七三

 第四項 警察訓練所七六

 第二節 治安七八

 第一項 概況七八

 第二項 機關七八

 第一項 第一種工業一三三

 第二項 第二種工業一四四

第八章 交通一三五

 第一節 鐵道一三五

 第二節 道路一三七

 第一項 道路一三七

 第二項 自動車道路一三八

 第三節 通信一三三

 第一項 概況一三三

 第二項 郵政一三四

 第三項 電信・電話・電報一三五

第九章 商業及金融一三八

 第一節 商業一三八

 第一項 概況一三九

 第二項 商品の移動一四〇

 第三項 物價一四二

 第三項 匪賊狀況八一

第六章 原始產業九四

 第一節 農業九四

 第一項 概況九四

 第二項 農業經營九七

 第三項 耕地及農產物一〇一

 第四項 農業團體一〇八

 第五項 一般農民生活一〇八

 第六項 農業移民一〇九

 第二節 林業一〇九

 第三節 牧畜一一一

 第四節 鑛產一四四

 第五節 農事試作場一四四

第七章 工業一三三

 第一節 概況一三三

 第二節 各種工業一三三

 第四項 商習慣習一四四

 第五項 商務會一四四

 第二節 金融一四七

 第一項 概況一四七

 第二項 金融機關一四七

第十章 教育及宗教一四九

 第一節 教育一四九

 第一項 概況一四九

 第二項 機關一五六

 第三項 社會教育一五七

 第四項 日語教育一五八

 第二節 宗教一五九

 第一項 概況一五九

 第二項 地方の迷信一六〇

第十一章 社會事業一六一

 第一節 概況一六一

目次

第二節 機關及施設……………一六一

第十二章 衛生……………一六四

第一節 概況……………一六四

第二節 機關……………一六六

第十三章 附録……………一七〇

第一節 集團部落……………一七一

第十四章 結論……………一七三

以上

奉天省東豐縣事情

参事官 楠 美 省
副参事官 濤 川 郁 吾



第一章 總 說

第一節 縣の歴史

東豐の地は略々舊東三省の中央遼寧省の北邊に在り、元山岳重疊として草木繁茂し、禽獸の棲息するに委し、清朝の世帝皇の狩獵場に指定せられたる時は勿論、明、宋、唐、漢以前に於ても、唯其の何れかの國の領域と云ふ名のみ。住民としても少く歴史的事實に乏し。降つて光緒二十九年官地の拂下を行ひ住民を招來し、行政區劃を定め、東本縣と稱するに及び人文漸く興り、爾來三十有餘年の歲月を経て今日の狀を爲す。

縣の歴史は東豐縣の創りてより僅々三十數年の歴史に過ぎざるも、種々の文獻や古老の言に依り此の地の上古より今日に至る地域的沿革を概説せば次の如し。

姬周時代に於て肅慎氏の地たり。歴史を續けば周の武王の十四年肅慎楛矢を貢すと在り、肅慎は東北の夷にして今の奉天省の東北部、吉林省の東南部一帶は彼の屬領地たり。是を以て縣内に人民の移住せるは周以前なるべし。

目次

目次

孫文と彼をめぐる人々	1
蔣介石	15
抗日闘争中の人々	
李宗仁	41
白崇禧	45
陳何應	100
顧維鈞	114
陳友仁	118
張孫科	119
學良	120

目次

中國共産黨の人々

朱 德・毛澤東	一四
葉 挺	一六
項 英	一七
周 恩 來	一八
王明(陳紹禹、陳紹玉)	二〇
葉 劍 英	二二
傅 克(秦邦憲)	二三
オレルスキ	二五

新政變を導く人々

臨時政府要人	二七
王 克 敏	二八
王 揖 唐	三〇

目次

湯 爾 和	一四
齊 燮 元	一六
董 唐	一七
江 朝 宗	一八
中支維新政府要人	二〇
梁 江 志	二二
王 子 惠	二四
その他の人々	二六
ゼークト將軍	二八

孫文と彼をめぐる人々



孫文と彼をめぐる人々

私は生きてた時代の孫文とは縁故が薄かった。その代り孫文のミイラには夢でウナサれる位會つて居るのである。孫文といへば、あの黒髪、豊頬、美髯を想ふ代りに、暗紫色にやせこけた横顔がすぐ、眼底に浮かんでとれないのである。孫文の高遠な理想の代りに、蒋介石始め孫文の後継者が行なつた革命の血腥い、えげつない現實が先づ眼にうつるのである。生前の孫文には僅か二回しか會つて居ない、それも極く晩年の病中でであつた。

民國十三年（今年は民國二十七年）の晩秋だつたと思ふ、第二奉直戦争で吳佩孚が山海關で破れて張作霖が破竹の勢で天津に遣入つて來た。この山海關の戦は奉直天下分け目の戦であつたが確か勝負の決定したのは十月二十四日頃だつたと思ふ。その日僕等は秦皇島の吳佩孚の總司令部の列車の中に住んで居た。薄ら寒い日であつた。朝の九時頃吳佩孚は電報を自身で翻譯して居たが、スツクリ立ち上つて李參謀長を呼んで天津行き汽車の準備を命じて居た。吳佩孚

は顔の色一ツ平常と變つたところがなかつたが、李さんが急に蒼白になつた。僕等も李さんの顔色で只事でないと思つたが、それが、この山海關の勝負を決定する動機になつた。即ちそれまで熱河に出陣して居た馮玉祥が戈を反して北京に入り、曹錕大總統を監禁して北京混亂といふ電報であつた。僕等も這々の體で天津に返り自動車で北京に入る。斯くして天下は、まあ張作霖のものになりかけた。然しこの戦争の勝因を作つた馮玉祥としては、張作霖に大手を振つて天下を握られて自分には殘飯しか與へられない破目になつては大變である。そこで、馮玉祥としては、天下の長老を集めて、合議制度の政權を樹るといふことを強く主張したのであつた。これが、段祺瑞、孫文、張作霖、馮玉祥の四頭政治が畫策された原因で、そのため孫文一派の南方革命派が北方に誘ひをかけられるといふことになり、孫文は廣東から家の子郎黨四十幾人を引き具して、十數年ぶりで北京を踏むことになつたのである。一寸壯觀といひなかつたが永年の失業政治家がぞろ／＼と天津に這入つて來た光景は餘り品のいいものではなかつた。これが僕等が南方革命勢力と接した始めで、孫大砲に會つたのもその時である。孫文は頗る氣をよくしてゐたやうであつた。乾分の戴天仇や汪兆銘や、張繼なども、僕等のやうな小僧を捉

へて、今にも國民黨の天下になるやうなあけすけの談をしたものであつた。僕等のやうに北方の政治家ばかりしか知らないものには、實に交際しよい田舎政治家のやうな氣がした。これは一面彼等が在野の政治家として無責任、放浪の地位に居たからであらうが、氣のいい日本人には、すぐ同志といふ感じをもたせたものである。年少輕薄な僕等は同志扱にされることが悦しかつた。然しこの手輩が後年一度び南京に政權を樹てるや、實に嫌味たつぷりな、交際の悪い一群と早變りするのである。孫文も或はさうではなかつたらうか、彼が天下を握らずして死んだことが、どれだけか孫文を生かして居ることになつてゐるのではあるまいか。

孫文は天津で病氣となつた。顔色が黃くなくなつて全身がだるい、日本の醫者に見せると肝臓が悪いといふ、梅毒性の疑がないでもないといふ。これが妻君の宋慶齡の耳に入つたのである。「孫さんに限つてそんな筈はない」と宋慶齡の機嫌は頗る悪い。それやこれやで孫文は病體をまして北京に入るといふことになつたのである。その前に段祺瑞はすでに北京に入つて安福派の家の子郎黨が天下の謀を行なつてゐる。馮玉祥の急造した貴州の攝政内閣に替ゆるに唐紹儀、李思浩、吳光新、章士釗、楊庶堪、等をもつて内閣を作つて居る。もとの駐日大使許世

英 林長民、湯漪など颯爽として活躍して居るのである。南方革命政治家が氣を採むこと一通りではない。遂に孫文の病體を擁して北京に入ることゝなつた。これが孫文の死を早むる一ツの原因になつたのである。

孫文と彼をめぐる人々

孫文が北京に入つた時は、僕は實に愉快であつた。一生忘れられない。それは當時僕等の惡手で、しよつちゆう氣分の上で壓へられて居た、ロンドン・タイムスのフレイザーがすっかり孫文に牛耳られたからである。孫文が入京した時はカラハン入京以來の北京の盛大な歓迎であつた。盛大なといふ言葉は恐らく當てはまらないであらう。カラハンが始めて北京に足跡を印したのは、丁度東京の大震災がガラツト揺れ始めた同一瞬間であつた。即ち九月一日の午前十一時五分頃日本の正午に當るのである。幾萬といふ學生や民衆が赤旗をおし立てて北京の京奉線の停車場を埋めたのであつた。この凄しい光景と日本の大震災をいつも想ひ合せるのである。これから後の日本は、支那大陸の上に延びて居るロシアの手に、どれだけ苦しめられたことか。それはさうとして孫文が入京した時も、これに劣らぬ熱狂的歓迎ぶりであつた。僕等は

4

孫文の宿舍にあってられた北京ホテルの玄関で、孫文を迎へることにしたのである。勿論フレイザー君も来て居た。このフレイザーといふ男は、當時のタイムス特派員で、北京の外交界では大きな勢力をもつて居た。五十を越した見るからに精悍な男であつたが、英國人に似ず、土方のやうな傲慢な男であつた。米國公使のシャーマンなどもこの人の前には頭が上らなかつた。頭を上げようとしてもフレイザーが頭ごなしにやつつけるので、寧ろやはらかに敬遠する風があつた。一番すごかつたのは、顧維鈞、カラハンの露支協定が成立して、カラハンが公使館區域の舊ロシア公使館にノソ／＼と這つて來た直後であつた。シャーマンは公使團の主席としてカラハンと接觸した。出来るなら公使館區域に入れず、カラハンを外交團會議に参加させまいとするのが、當時の公使館區域の空氣であつた。シャーマンはこのアトモスフィアを代表してカラハンと對立した。カラハンが聲明を出す、シャーマンが出ず、聲明戰を繰り返して居るうちに年少氣鋭のカラハンが散々シャーマンをやつつけて、大手をふつて公使館區域に這入つて來たのである。蟲のをさまらないのは、この猶太人嫌ひのフレイザーであつた。かね／＼シャーマンと僕等との共同會見の時に、フレイザーがカラハン排斥の急先鋒となつて、シャーマン

5

孫文と彼をめぐる人々

を激励してゐたのである。そのシャーマンがおめく（とカラヘンにやられてしまったといふこと）になるので、傲慢不遜のフレイザーの感情は爆發したのであつた。シャーマンがカラヘンを公使館區域に入れざるを得なくなつたといふ理由を説明する最後の共同會見で、この二人は遂に大激論を始め、相方脅自になつて喧嘩した。上品なシャーマンがここでも散々やつつけられて敗散したのである。勿論カラヘンに敗れたのはシャーマンだけの罪ではない。當時の公使團全部が分擔せなければならぬものではあつたが、このカラヘンの公使團入りは、支那の近世史に於ては實に大きな役割をするのである。世上では餘り注意されてゐないけれども僕等は支那の近世史の胎動は實にこの一事實をスタートラインとして始まつたと見るのである。

フレイザーが言ふには、『若しカラヘンが公使館區域に入り外交團のトワイアンとなるならば（當時大使を交換してゐるのはサウエト、ロシアだけであつた）外交團の結束は忽ち攪亂されるであらう。義和團事變以來、列國が支那を牛耳ることが出来たのは、一に列國が協調して支那政府に當つて居たからである。その結束の源は實にこの公使館區域であつて、各國の公使館が一つのフォートの中に一家族のごとく生活してゐるからである。列國の「協調」といふのは總括さ

れた力である、それ故に支那に對しては壓力がある。この協調が亂れて各國單獨の、一本一本の壓力に分散して見給へ、單獨な力で支那を牛耳り得る國は斷じてこの世界にないから……』といふのであつた。このフレイザーの見解は、當時は僕等は大見識とも思はなかつたが、一年経ち二年たち、そして今日の日支戦争によつてつくづくとその大見識であつたことを痛感するのである。果してカラヘンは八面六臂の大活動をして一年もたたない間に、公使團の結束をまんまと破つたのである。義和團事件以來三十年「五洲魔術團」と稱せられて支那政府の鬼門であつたこの公使館區域は、カラヘンの介入によつて神通力を失なつた。これから各國は公使團會議の羈束を放れて思ひ／＼に支那の機嫌をとつていゝ子にならうとする風があつた。當世の變化もさることながら由來支那を牛耳る國はなくなつたのである。

さてこの傲慢無比のフレイザーが北京ホテルの玄關に於て孫文との初對面に、ちかつにも氣の弱いところを見せて思ひがけない光景を見せたのである。孫文が入京した日は、零下十七度の寒い日であつた。孫文は毛皮の支那服の上に、更に毛皮の支那式オーバーを着て宋慶齡に支へられて玄關を上つて來た。傲慢無比のフレイザーは、ホテルの中でオーバーを着て帽子を被つ

てゐた。孫文が這入つて来て一番先登に近よつたのは、このフレイザーと確か今東京に居るユ・ピーのマーシヤル老人だつたと思ふ。息せききつて近よつたフレイザーが、孫文の數歩前に行くところしたはずみか立ち上つた。孫文の顔を見て度膽を抜かれた形であつた。最早や勝負はついた。フレイザーは帽子を脱いでキョトンと思はず最敬禮をしてしまつたのである。それからは宛も蛙が蛇に見込まれたが如く一步退り二歩退り、遂に一言も言葉をかけることが出来ず茫然と孫文が階段を上つて行くのを見上げて居るばかりであつた。この間は、僅かに一分の出来ごとであつたが、僕は孫文の正體を見たやうな氣がした。孫文のキャリアーを見ると、無責任な失敗の連続である。失敗の跡仕末は必ず他人がやつてゐる。それなのに孫文のフオーロウは決して離れない。傲慢無比のフレイザーを射すくめた孫文の人間の道力、これは説明の出来ない、東洋人的人格の深いところから出發するものであらう。孫文の乾分達は餓ゑながら孫文から放れ去ることが出来なかつた。この深い或るものが實は支那の近世史を生み出したものである。

孫文は北京で客死してミイラになつた。孫文の乾分達は西山會議などやつて分裂したりして、遂に北京の舞臺から消え去つた。だが此の頃から廣東においては新時代を生む胎動が始まつてゐたのである。北京の舞臺はこの胎動をちつとも感づかない。我世の春の軍閥們が動搖しかけた舊地盤の上に争鬪を續けたのである。今までは民國十三年秋から、十四年春にかけての出来事である。當時の軍閥争鬪史を走馬燈にして見返して見よう。

民國十二年の春の或朝——北京の北城の官廡胡同の黎元洪大總統の私邸を民衆が包圍した。電線は切られ、水道はとめられ、電話は切られた、大變な騒ぎである。馳けつけて見ると成程五六百の民衆が手に手に紙の小旗を振つて立つて居る。鴉片の切れた老人が鼻を垂らしたり、十二三の子供が居たり、昨日までは東單牌樓で俾を引いてゐた拉車的が居たりした。巡査は銃をかたにかけてポケットに手を突きこんでノンキに立つてゐる。正門のところを廻ると、居たく吾が友人の蔡君が獨りで終號して居るのである。蔡君は鐵良將軍の甥である、北京の顔役の一人で乾分の百人ももつて居る、光棍の親方である。斯うして黎元洪大總統は裏門から這々の體で天津に落ちのびるのである。實に簡単な革命であつた。蔡君が直隸派から貰つた金

は一萬元で、この運動に三千元は使つてゐないといつてゐた。その頃の民衆運動といふものは大體こんな調子のものであつた。

民國十二年の十月、黎元洪の逃げた後の北京政權は數ヶ月間ブランクであつた。象鼻橋の議會の造り出す内閣が變幻出沒、朝に起ち夕に瓦解し、遂に曹錕の賄選になるのである。この賄選を見に行つて、僕等は議會の一室に監禁された。議員一人當り五千元の買収を支拂つて、曹錕は大總統に選舉されるのである。十月十日曹錕は美しく着飾つて北京の西站に着いた。歡迎の群から一番先に手を差しのべたのは、むさくるしい大男であつた。當時南苑にあつて檢閱使をしてゐた馮玉祥といふ男ださうである。この大男が一年後には曹錕を監禁するのである。僕は一年後の十月吳佩孚とともに山海關にあつて馮玉祥の背叛、曹錕監禁の電報を受けて、第一に眼に浮かんだのは、この時の馮玉祥のなれくしい態度と、作り笑ひであつた。實にも支那の歴史は、三國誌の延長であるのだ。

その足で得意の曹錕は總統府に入る。僕は荒くれ議員の王乃昌君の僕役に化けて象鼻橋の國會で、曹錕の宣誓式を見ようといふのである。この宣誓式は實にも東洋の豪華版であつた。こ

の豪華版は後年僕が南京において國民政府成立式にまぎれ込み、蔣介石の宣誓を見たのと並べて、二天ヒストリカル・シーンであつたと思ふ。曹錕の子供のやうに紅潮した顔、血色のいい唇、朗々たる音聲、堂々たる體軀、反物行商の小商人あがりとはどうしても見えなかつた。侍衛室から見てゐると、賄選の請負人の議長吳景濂のはしやぎ方や、僕の旦那の王乃昌君の喜び方つたらなかつた。誰れ彼れと相手かまはず握手する僕の旦那であつたのである。

民國十三年秋、奉直第二戦争の幕が切られる。僕は吳佩孚の總司令部列車に乗り込んで山海關に行く。支那の戦争がこれ程激烈であらうとは夢にも思はなかつた。奉天軍の飛行機が毎朝二十數臺やつて來ては、總司令部の列車を目標けて爆彈を落して行く、技術の幼稚な故もあつたらうし、馬鹿に高いところから落すので、彈は多くは見當外れに落ちた。そして多くは不發であつた。後では支那の農夫が鋏をかかへて待ちかまへて居た、爆彈の落ちたところに走り集まつた鐵片を拾ふことに夢中になつてゐた。悲慘であつたのは吳佩孚の親衛隊である少年兵二千人の參戰であつた。十二歳から十五歳までのこの少年兵は、石門塞といふところに突出して來た張學良軍と相對峙した。この少年軍は散々痛められて歸つて來たのは三百名足らずであ

つた。この少年軍が縦隊に分れて石門塞に向けて出發した夕方の悲慘な光景が今も眼にあるのである。斯くして吳佩孚は死力を盡して戦つたが、背後に馮玉祥が襲つたので大敗を喫して直隸派の崩壊となり曹錕大總統は幽囚の身となる。吳佩孚は手兵を汽船二隻に分乗せしめて、大迂回して上海から長江を遡り、湖北に上陸して洛陽に歸へるのである。その間、北京の天下は代つて勞頭に書いた段祺瑞、孫文、張作霖、馮玉祥の四頭政治になり、北京は馮玉祥が握り、奉天派の地盤は天津までとなる。これが更に争のもととなつて張・馮の大戦争となるのである。

同じ頃、その頃馮玉祥は單獨で張作霖の勢力と抗争する自信がないので、背後にロシアの勢力を利用することを考へた。政治はそろ／＼赤くなりかけて居た。その眞先に表れたのが宣統廢帝いぢめであつた。紫禁城には手を入れる、廢帝の生活は脅かす、一時、ロマノフ王朝の最後の光景が北京に再現しはしないかとハラ／＼さしたものであつた。或日僕は滿洲の遺臣の松清濤君に手びきして貰つて、醇王府に廢帝を訪ふたのである。醇王府の奥まつた、うす暗らい和室に案内された。廢帝はこゝ何年か、英人のジョー・ストーン以外の外國人には會ふ機會

をもたれなかつた。身邊の不安も多かつた時であるから、年の若い日本人が訪問したことを殊のほか喜びのやうであつた。父君の醇親王も出てこられ、馮玉祥の仕打ちの情ないことを繰返しく攻撃された。廢帝は馮玉祥軍に荒された紫禁城内に残して來た國史研究の文獻を非常に惜しがられてゐた。今ではその文獻が皇帝の手に返つたかどうか。廢帝は粗末な洋服を着て、ゲートルを捲いて居られた、このゲートルが問題であつたのである。壁を見ると日本の攝政宮殿下の新聞寫眞がたくさん切り抜いて貼つてあつた。いろ／＼と攝政殿下の御話しがあつた。非常にこの東海のお若い皇子に思慕の情を寄せられてゐることが判つた。それから春秋十幾年、滿洲國皇帝として御入京の御り覽視廳の前で、秩父宮と御同車にて御通過になる姿を拜した。往年のことを想起して感慨無量、眼底に涙の湧くのを禁じ得なかつた。

その日に廢帝は日本の公使館に自動車で發見された。ゲートルはそのカムフラージュであつたのだ。

孫文北京に客死後の一、二年間は、文字通り軍閥の亂闘時代であつた。李景林、馮玉祥の

戰、蘇浙戰爭、郭松齡の反亂、吳佩孚の復活、そして遂に張作霖の入關、北京に於いて大元帥に就任することとなる。この間僕は支那を留守したので走馬燈を見損なつた。北方軍閥が永年の争鬪にグロキ一となつてゐる時に、南方の革命勢力は動き出したのであつた。

民國十五年七月九日、蔣介石が始めて、世界の舞臺に現れる。廣東において革命軍總司令に就任して北伐宣言をやり、廣東軍全部に對して動員令を下すのである。それまで僕は全く蔣介石の名を知らなかつた。始めはどうしても壁石の一種としか考へられなかつたのである。

七月二十九日、蔣介石は廣東を出發して北伐の途に上る。ボロヂン、ガレンが同行する。李濟が廣東に於いて革命軍總司令代理、譚延闓が政治會議主席となつて留守をまもる。九月十三日には武漢三鎮の總攻撃、十月八日これを占領、同時に何應欽が第一軍を率ゐて廣東から福建省に入る。第四軍長李濟は江西討伐に向ふ。十六年二月孫傳芳の五省聯合軍を追うて、江西省を完全に把握、李烈鈞が政府主席になる。同年三月二十一日第一軍薛岳軍上海龍華占領。同日蘇州、無錫、崑山占領。三月二十三日上海占領。二十四日南京占領、南京事件起る。

十六年三月七日武漢口において三中全會開かれ、これを契機として國共分裂、四月十二日蔣

介石上海に於いて清共運動に着手。

六月十九日蔣介石、馮玉祥、白崇禧徐州會議を開き馮玉祥革命軍に参加。

七月から八月間革命軍各所に敗戦、八月十一日武漢南京妥協成立、十四日蔣介石下野尚鄉壽化に引退、後日本に赴き、歸つて宋美齡を娶る。八月二十三日南京に特別委員會組織さる。

十六年四月閩錫山革命軍に参加。

十六年七月三十一日、賀龍、葉挺の共產軍南昌に背叛、後年共產軍の出發點となる、十二月十一日廣東共產黨の事件勃發。

十七年一月九日、蔣介石南京において復職再び革命軍總司令となる。二月九日北伐軍の新編成總司令兼第一集團軍長、蔣介石、第二集團軍長馮玉祥、第三集團軍長閩錫山、第四集團軍長李宗仁。

五月三日濟南事件

六月二日革命軍滄州を占領。六月三日張作霖北京を退出。四日午前五時半奉天にて爆死。

かくして北伐完成となり世は國民黨の天下となるのである。此の目まぐるしい北伐の間

は、僕は支那に居なかつたので目で見ることが出来なかつた。僕が再び南方革命勢力に接したのは、濟南事件の直後から七年半、蒋介石の國家建設の基礎工作が殆んど完成するまでであつた。

孫文と彼をめぐる人々

僕は民國十七年の七月末、蒋介石が化伐完成して意氣揚々として南京に凱旋するのを下關の埠頭に迎へたのである。恐しく暑い日であつた。蒋介石は日焼けして顔にしよつちゆう微笑をたたへて居た。片手には宋美齡が確りと抱きついて居る。蒋介石は何だかまきまりが悪さうであつた。僕等は孫文が宋慶齡に支へられたゆかしい情景を思ひ出したのである。失敗續きの老政治家夫婦と、得意の凱旋將軍の新婚夫婦との發散するアトモスフィアは、こんなに異なるところかと思つたのである。始めから好感がもてなかつた。岡焼であつたかも知れない。

それからの南京は統一のアトモスフィアに浮き立つたものであつた。一般の民衆も過去二十年の軍閥鬭争に疲れて居た時であつたから、「北伐完成」「支那統一」の宣傳の大文字には新しい期待をかけたやうであつた。馮玉祥がトラックに乗つてやつて來る、閻錫山が南京入

16

りをする、全國の將領が一堂に會して蒋介石を中心にして、今後の政治を按配しようといふのである。僕等は當時の南京の空氣に眩惑されて、もはや支那には軍閥鬭争はあるまいと考へたりしたのであつた。當時の空氣を最も代表したものは、十月十日行はれた南京政府の正式成立式であつた。この歴史的風景を見たのは恐らく外國人では僕等だけであらう。當時の記録から

孫文と彼をめぐる人々

『その朝は空はコバルトに晴れ渡つて居た。そのコバルトの空を國民政府のダグラス機が、赤い胴と翼とを輝かせながら飛んで居た。民國十七年十月十日、即ち國民政府が正式に二院制をもつて成立する日である。南京の街は、青天白日旗と滿地紅旗で埋まつた、辻々には國民政府得意の花牌樓が立てられて今日の目出度き出生を祝うてゐるのであつた。菊の香りは巷に満ちて居た。空から降つて來た紅色の宣傳ドラを拾うて見ると、ゆくりなくも、「打倒帝國主義」とあつた。僕は生るるか生れないかの國民政府が早くもその生聲として「打倒帝國主義」の叫びを上げてゐる。この國民政府を中心にして物産ごい風雲が捲き起されるだらうと考へながら國民政府成立式典の行はるる丁家橋の國民黨中央黨部に急いだのであつた。

式場は菊の花で一杯飾り立ててあつた。いつも全體會議や代表大會の行はるる大きなホール

17

である。昔はここで南京國會が開かれて、若かくて美男子だつた今の林森などが雄辯を振つた所である。星移り時變り民國十七年にして國民政府成立式を舉ぐ、感慨無量の林森の山羊髯などは全く白くなつてゐる。

正面には演壇があり、等身大の孫文の寫眞が飾つてあり、その左右に孫文の遺言が書いてある。僕は孫文の遺言を読む度に思ふ、この遺言は僕がまだ北京に居た頃鐵獅子胡同の顧維鈞の舊宅で書かれたものであつた。孫文が革命家として五十七年の生涯をまさに終らんとてこの遺言を書かした部屋こそ、ハイカラ白面の顧維鈞が黃夫人といちやつき續けた部屋である。孫文が死んだのは三月十二日朝であつた。その日は春に似合はずカラリと晴れてゐた。僕等が自動車で駆けつけた時は、孫文は最早この世になかつた。ベットに横つた孫文の顔には白い布が敷かれてあつた。その側には宋慶齡夫人が椅子によつて泣いてゐた。入口近くに立つてゐた李烈鈞の眼からは大きな涙がほほに傳ひ流れてゐた、汪兆銘戴天仇等も暗然として立つてゐた、惨めな陰惨な光景であつた。此の惨めな屋敷打ち枯らした革命家の一團が、後年天下を乗つたらうとは誰れが思ふであらう。僕は孫文あつてさへも惨めな國民黨はもうこれで駄目であらうと

思ふた。遺言を口述した孫文の心中にも、死後五年の今日に於いて國民政府成立式が舉行されやうとは夢にも思はなかつたであらう、時勢も轉廻し始めると急速に速度を増すものである。孫文四十年の努力は何等生前に報いられなかつた。死後わずか五年ならずして孫文の幕下の革命兒達は今や、中華民國の中央政府を茲南京に組織し、今日晴れの成立式に續々と臨んで居るのである。

彼等が國父と仰いだ孫文遺像と遺囑の前に國民政府成立組織の大典が行はれる、彼等の心中また祭するに餘りありではないか。

やがて國民黨監察委員の吳稚暉、李石曾、張靜江等が、いかにも元老らしく前面に並ぶ、日本の官僚上りの元老と違つて、これ等の元老は何となく濫い。蒋介石の尖つた頭、後頭部が出て、くびすぢの凹んだ特長だ。中山服を着て颯爽たる今日の姿である、國民政府主席となつた蒋介石である。この時くらゐ彼が悦しさに見えたことはないのである。蒋介石の顔を見るといつでも陰氣に見える、心が定まらないのだ、常に何か考へてゐる、何か企んで居る、蒋介石の眼は猿の眼のやうに動くのである。さすがにこの日の彼は悦しさに、僚友立法院長胡漢

民の肩を抱くやうにして立つて居た。その隣りに考試院長戴天仇が淺黄の粗末な綿服を着てイソ／＼と立つて居る。長鬚を撫して悠然と立つた監察院長于右任、これに續いて行政院長譚延闓がこれこそ蒋介石の昂奮と正反對に茫漠として立つてゐる。孫科、宋子文、何應欽、王正廷、王寵惠などがずらりと一列に並んで居る。北伐完成直後である。着て居る着物は殆んど全部粗末な綿服である。蒋介石だけセルのやうな中山服を着てゐる。やがて吳稚暉老は演壇に上つた、後では感心しなくなつたが比の頃の吳稚暉の演説は實によかつた。熱もあつたし論旨もよかつた、僕等は吳稚暉を南京第一の雄辯家と評したものであつた。彼は吾吐朗として一場の訓辭をした。國民黨は國家の行政を今諸君に委ねんとしつゝあるのである、我等の先輩孫先生死して五年我等は今こそ彼の遺言を實踐せんとするものである。四十年來の革命の道程を説き去り北伐の辛苦を説き來り言々句々に熱情があつた。この雄辯こそ、吳稚暉一生一代の雄辯中の雄辯ではなかつたらうかと僕は思うてゐる。聞くもの肅然として頭を下げたのである。泣きべそ戴天仇君早や涙を拭いてゐるのさへ見えたのである。

吳稚暉の演説が終つて三分間の黙禱、やがて蒋介石は列の前に三步出た。宛も一年生の級長

のやうにだ、そして頗る緊張したおかしな聲で何事かいつてゐた。恐らく孫文の遺像に對する宣誓の言葉であつたらう、やがて蒋介石の號令で一列に並んだ十幾人の人々は一齊に左手を高く上げて同時に何事かいつた。その聲は周圍の壁や屋根の圓蓋に反響したりして宛も丘の下の地下からのうめきのやうに聞えた、各人各人の緊張した聲の合唱は、唱歌の二重奏三重奏とは異なるのである。一種異様のものすごいものとなるのである。僕等はこの聲を聞いた爲めか、何だかこれ等の人々によつて支那統一の大業が出来るのではないかといふ感じを抱いたのである、只漠然とそんなに感じたのである。』

この統一的アトモスフィア翌年の民國十八年三月まで續いた。三月開かれた第三次全國代表大會をキツカケに武漢に遷徙して居た李宗仁一派の廣西派と蒋介石との戦争が始まるのである。原因は原則通り地盤の問題から。

第三次全國代表大會は蔣政權の確立の第一歩であつた。蒋介石の獨裁はこの大會後より表面化するのである、僕等はこの大會の劈頭において、蒋介石なるものの人物を見直さねばならな

い事件に突き當つたのであつた。それは、蒋介石は始め武漢派と戦争しなくなつた、出来るなら妥協したかつた。そのために武漢派の一人である李濟に南京入りを懇望したのである。吳稚暉、李石曾、張靜江などの國民黨の元老が一切の保證を與へたので李濟は、南京にやつて来て、第三次全國代表大會の會開式に列した。蒋介石の喜び方は一通りでないやうに見えた。傍聴席から見てみると蒋介石は李濟の肩を抱いて、ニコ／＼と笑ひながら議席について居た。僕等はこの様子なら武漢との妥協も出来るであらうと思ふたが、會が終つて玄關に來た時に異様の光景に接したのである。會場から出て來た李濟に蒋介石部下の將校が何事か言つて居るのである。自動車がつつと李濟の前に停ると、將校はすばやく李濟を自動車に引き込んでドロ／＼と十四五人の憲兵がこの車の周圍に乗つたかと思ふと自動車は走り出した、ほんの一分足らずの出來事である。殆ど誰れも氣がつかなくなつた。僕は蒋介石を探してその顔を見ると、今までの蒋介石とはうつつ變つて冷酷な眼をしてゐる。李濟はとうして監禁されたのである。翌日の新聞には堂々と監禁の事實が報道された。代表大會の異分子は震ひ上つてしまつたのである。蒋介石の露骨な獨裁はこれを起點として表面化したのであつた。

代表大會が済んで、蒋介石は再び武漢討伐の途に上り、忽ち敵を敗つて再び凱旋將軍として南京に還る、旭日昇天の勢であつた。

この蒋介石の獨裁に眞先に反抗して立つたのが馮玉祥、閻錫山であつた。勿論、争ひの根柢は地盤の問題であつたが、表面は蒋介石の獨裁反對であつた。汪兆銘はじめ蒋介石に對する國民黨の不平等分子は、これに呼應して北平に擴大會議を開いて國民黨の本家を主張する。遂に河南の戦争となつて、双方二十數萬の軍隊を並べて八ヶ月の對戦をするのである。奉天の張學良が蒋介石と合體したので遂に蒋介石の勝利となる。この勝利によつて蒋介石にとつての殘存軍閥は、ただ廣東派と奉天派のみとなり、蔣政權の基礎は益々強固になつた。蒋介石は二度凱旋將軍の榮譽を擔うて南京に歸るのである。従つて蒋介石の獨裁は益々露骨になつた。遂に胡漢民の監禁事件が起るのである。蒋介石の獨裁に反感をもつた胡漢民が立法院長の職を利用して約法制定に當つて、蒋介石に獨裁が出来ぬやうにガンデガラメに、束縛しようとしたのである。その草案をめぐつての喧嘩であつた。これもまた當時の記録から

「三月一日の夜は、南京は朧月夜であつた。明の故宮跡の麥畑には雲雀も浮かれて居たであ

らう。故宮に隣して立てられた軍官學校、その一劃に蔣介石の總司令官舎があるのである。八時頃から蔣介石を中心に、胡漢民、李石曾、吳稚暉、戴天仇、于右任、林森等が會合し約法の再審議を行つたのである。蔣介石は幾度も胡漢民に對して、修正を要求した、胡漢民は頑として聞かない、純理論一點張りで蔣介石に喰つてかゝり、果ては蔣介石の獨裁の野心を曝露したのであつた。後で、戴天仇は僕に話した。此の時位、胡漢民が凄ごい表情をしたことはなかつた、眉を逆立て、額に青筋を立て、蒼白な顔をして居た、今一步進めは格闘となるところであつた。蔣介石はと見ると、あの口を引きしめ、目は怒りに燃えて居た、拳を持つた手はわなわなと震へて居た、氣の小さい戴天仇は、この席に居ることがとても辛かつたさうである。やがて蔣介石はつと立つて、別室に引つこんだ。此の間に、胡漢民の衛兵五人は監禁され、胡漢民の監禁の命令は下されて居たのである。蔣介石は間一髪に決意を實行する男である。胡漢民は黨國の元老たる自分を監禁するなどは夢にも思つて居なかつたさうである。會議はこれで終つた、李石曾や、戴天仇や、吳稚暉は歸つて行つた。胡漢民はそのまゝ自動車に乗せられ南京城外二十五哩の湯山温泉の湯山クラブに幽閉されてしまつたのである。

三月二日の朝は、蔣介石が國民政府の紀念會で報告演説をすることになつて居た。僕は一體蔣介石がどんな顔をして、どんな演説をするかに非常な興味を覺えたので、この演説を聞きに行つた。蔣介石は平然と、實に餘りに平然と立つたのである。平常の蔣介石と、どこにも相違がない、口邊に微笑さへ浮べて居る、僕の心の中には驚きとともに「こん畜生」といふ敵意さへ浮かんたのである。

「此處に自分は悲しむべき報告をしなければならぬ。老同志胡漢民氏は革命の功勞者である。我等と意見の合はざる點もあるが病氣休養の必要ありとのことで、實に残念だが一時立法院長を辭職されることになつた。」

これが老同志胡漢民を葬り去る言葉であつたのだ。

胡漢民事件をキツカケに胡漢民派の南京引揚げとなり、廣東政權の組織、——蔣介石の下野芝居、——共產黨の猖獗によつて蔣介石の出馬、——奉天事件によつて奉天軍閥の去勢、——上海事件で洛陽遷都、——共產軍討伐の成功、——廣東派統一、——西安事件等の經過を經、

その間浙江財閥の膨脹と、これに伴ふ蔣介石の軍力の強化、組織の成熟、ナショナリズムの強化等の絲を織りなして蔣政権は強化の一途を辿り、強固な獨裁政權を樹立して今日に至り、國力の過信と日本輕視の風潮から今回の支那事變を惹起するに至つたのである。

★入るぐぐめを彼と文孫

26

蔣 介 石

センチメンタリズムと蔣介石

蔣 支那事變になつてからの蔣介石の行き方が、過去十年間の蔣介石のやり方と非常に異ふ一點
介 がある。僕はこの一點を非常に面白く思ふ。過去の蔣介石を一貫するものは、極端なリアリス
石 ムであつた。現實政治家として終止した、政治に緩急に應ずる伸縮性があつた。危険と見れば
少々の耻をしのんでも直面しない風があつた。自己政權一點張りで、自己政權強化、保存のためならば少々體裁の悪いことも押し通した。自分の立場を冷靜に見定めて周圍の情勢を巧妙に利用する餘裕をもつて居た。斯ふいふ點が蔣介石が成功した大きな要素であつた。彼は如何なる場合でもセンチメンタリズムに落ちない男であつた。

然るに一九三六年十二月の西安事件は、彼に大きな變化を與へた。僕は今回の事變で蔣介石が没落するとするならば、その原因の一つに西安事件の役割りを大きく買はねばならぬと思

27

最近支那紙の對日論調 目次

は し が き 五

一 極東の形勢と支那紙の認識

1 太平洋の形勢と日支問題
五月二十一日 天津 大公報の社説 六

二 日支外交關係と支那紙の論調

1 今後の日支外交
四月十五日 天津 大公報の社説 三

2 汪兆銘氏の所謂對日態度
五月四日 南京 中央日報掲載 九

3 何より政治問題の解決が先決問題
南京政府新任宣傳部長 邵力子氏談
四月二十七日 上海 新聞報掲載 三〇

第一輯	中 國	1年6月發行
第二輯	滿 洲	1年7月發行
第三輯	北 日	1年8月發行
第四輯	最 東	1年9月發行
第五輯	滿 臺	1年10月發行
第六輯	最 東	1年11月發行
第七輯	滿 臺	1年12月發行
第八輯	最 東	1年1月發行
第九輯	滿 臺	1年2月發行
第十輯	最 東	1年3月發行
第十一輯	支 那	1年4月發行
第十二輯	滿 洲	昭和11年5月發行
第十三輯	朝鮮農民の滿洲移住問題	昭和11年6月發行
第十四輯	支那經濟建設事業の現狀	昭和11年7月發行
第十五輯	支那當面の重要問題	昭和11年8月發行
第十六輯	滿洲國林業の現勢	昭和11年9月發行
第十七輯	臺灣の地下資源	昭和11年10月發行
第十八輯	支那幣制改革の回顧	昭和11年11月發行
第十九輯	滿洲國水産業の現勢	昭和11年12月發行
第二十輯	西安事變の全貌	昭和12年1月發行
第二十一輯	滿洲國經濟建設概觀	昭和12年2月發行
第二十二輯	朝鮮の地下資源	昭和12年3月發行
第二十三輯	英人の觀たる支那の建設運動	昭和12年4月發行
第二十四輯	西安事變後の中國共産軍の動勢	昭和12年5月發行
第二十五輯	最近支那紙の對日論調	昭和12年6月發行

昭和十二年六月廿五日

東洋協會調查部 惠 殿

東洋文庫

4 駐日支那大使許世英氏の談
四月二十六日 北京 益世報掲載……………三

三 日英交渉と支那紙の觀測

1 日英關係と支那
三月二十五日 天津 大公報社説……………三

2 日英交渉の趨勢如何
五月二十七日 天津 大公報社説……………七

四 日支經濟提携に對する支那紙の批判

1 日支經濟提携批判
三月二十二日 上海 新聞報掲載……………三

2 北支に於ける日支經濟提携側面觀
四月二十六日 上海 時事新報掲載……………五

3 津石鐵道の完成と塘沽築港の意義
四月十四日 上海 新聞報掲載……………四

4 日支國交の行詰り
四月十三日 北京 益世報掲載……………四

5 冀察方面の問題に關して
五月三日 天津 大公報社説……………四

6 日本の我關稅引下要求に對する感想
五月十七日 上海 新聞報社説……………五

五 日本の政局に對する支那紙の觀察

1 日本の政局の解剖
四月十一、十二日 天津 大公報掲載……………五

2 日本議會の改選と政治の趨向
四月十二日 上海 新聞報社説……………六

3 日本政局の分析と其動向
五月十九日 上海 新聞報社説……………六

4 日本政局と日支關係
四月十三日 天津 大公報社説……………七

六 日本^の貿易^に對^{する}支那紙^の憶說
 1 日本戰はずして崩壞の機運に在り
 五月二十日 南京 救國日報社説……………七

七 日本^の南進政策^と支那紙^の論評
 1 小林大將南洋訪問の先聲
 四月十二日 上海 新聞報掲載……………八

八 日本新内閣成立に對する支那紙の論評
 1 日本の新内閣成立す
 六月二日 南京 救國日報短評……………六
 2 日本内閣の交迭
 六月二日 天津 益世報社説……………六
 3 近衛組閣後の日本の政局
 六月四日 上海 新聞報社説……………九
 4 日本近衛内閣の前途
 六月四日 天津 大公報社説……………七

附 録 東洋時事日誌……………六

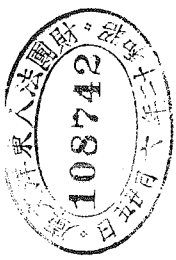
最近支那紙の對日論調



は し が き

最近日支國交の調整、對支再認識の必要が唱導せられるに至つて、わが國人の對支論調に急變化を生じたことは、周知の事實であるが、これに照應したかの如く、支那人の間の對日論調が最近數ヶ月以來、急激な變化を來たしたことは、驚くばかりである。

現實は意識を産む。かゝる變化をなした原因が、今日わが國が對支再認識を強いられた、ある支那自體における現實の諸變化とわが國內における政治經濟情勢の變化によることは疑ひない。支那自體における事態の變化—それは極東における列強の勢力關係、支那の政治的統一の進展、經濟的建設の進捗、民族運動の擡頭等複雑なる政治的、經濟的、社會的現實にあり、我々はこの現實に對し正しき認識を把握する必要があると共に、またこの現實の變化が産み出した意識の變化をも同時に再認識せねばならぬ。けだし最近における支那人の對日論調の變化は全くその現はれであり、それがよきにつけ悪さにつけ、日支國交の調整、今後の日支關係の將來に至大の影響を有するものだからである。惟ふに最近支那人の對日論には傾聽するに足るべきものもあるが、又中には偏見にかられ、支那の國內情勢



やわが對外政策に對する彼等の錯誤も含まれてゐる。何れにしても彼等が東亞の形勢や日本の國情乃至日本の對支政策を如何に考へつゝあるかは、われらにとつて大いに參考とすべく、我等の常に注意を忘つてはならぬ事柄である。然るにこの方面に對する報道は比較的少ない。この意味において、我々は最近支那の主要新聞から代表的と思はれるものを選び、(一)極東の形勢と支那紙の認識、(二)日支外交關係と支那紙の論調、(三)日英交渉と支那紙の觀測、(四)日支經濟提携に對する支那紙の批判、(五)日本の政局に對する支那紙の觀察、(六)日本の貿易に對する支那紙の憶説、(七)日本の南進政策と支那紙の推測、(八)日本新内閣成立に對する支那紙の論評の諸項目に分ちて紹介する次第である。

一 極東の形勢と支那紙の認識

1. 太平洋の形勢と日支問題

(民國二十六年五月二十一日 天津 大公報社説)

十九日倫敦タイムズ紙は濠洲のライオンズ首相が提議した太平洋諸國の不侵條約締結問題に對して曰く、「太平洋に於ける國際關係に關する新しき基礎の上に建てられる如何なる計畫もそれは皆日本がそれに協力の意思を有するや否やに依つて決定されるものである。」又曰く、「支那は最も利害關係を有

する重要分子であつて、苟くも其獨立國たるの權利と責任とが完全に承認されるに於ては、支那が之れに添加することを欲しない何等の理由もないものと見られる。」又曰く、「日蘇支三國が眞に善隣の態度で圓卓會議を舉行するなど云ふ事は今日に於ては到底之れを語るべくもない様に思はれるが、さりとて又永遠に是れは出來ない相談だとも斷言することは出來ない。之れを要するに極東問題解決の爲めの決定的な有力な素因をなすものは東洋に於ける兩大隣國が如何なる關係にあるか即ち日本が支那に於て實施する對支政策の目的如何それである。」又曰く、「英米の輿論も彼此同様である。日支の關係は誠に尖鋭化したただに感情の事柄ばかりではなくなつてゐるので、日支間の相互の信任が恢復されなければ、ライオンズ首相の提議になる制度の如きも、實際上とても實行され得ないことである」云々。このタイムズ紙の所論は實に適切明白で、事態をよく喝破し、確かに英國政府の太平洋と極東問題に關する見解を反映して居るものと見られる。而して實際上に於ても權威あり、影響力ある文字であるのである、太平洋の相互不侵略條約の提議に關しては本紙はすでに先日之れを論及したが、茲に再びこの問題を分析して具體的に其意見と觀察とを述べ、タイムズ紙の批評に答へよう。

一、濠洲の提議といふも、その意見は今日新に唱導され出したものではないのである。なんとすれば第一に西歐の情勢が以前に較べて改善されたことである。謂ゆる獨伊樞軸の成立により、愈々英佛蘇の團結を促進させたが、同時に英佛蘇の目的は戦争をやめることであつて、従つて獨伊に對しても